

ウィザス

「ウィザス」はウィズアス = with us "共に生きる—男女共生社会" の理念を表しています。

特集 男だって生きづらい

寄稿 男性の「生きづらさ」

～ 解消の鍵は
男女共同参画社会の実現にあり ～
関西大学文学部 教授 多賀太さん

日本は、国際社会の中でも男女格差が極めて大きく男性優位が顕著な社会です。世界経済フォーラム発表のジェンダーギャップ指数によれば、2020年の日本のジェンダー平等達成度は世界156か国中120位でした。特に格差が大きいのが政治と経済の領域です。例えば、2018～19年の女性管理職の割合は、欧米諸国30～40%に対して日本では約15%、2017～18年の男性の平均賃金を100とした女性の平均賃金は、欧米諸国80～90に対して日本は約73でした。

こうしたなか、近年、男性たちが抱える「生きづらさ」にも注目が集まっています。男女格差の実態から見れば有利であるはずの男性たちが生きづらさを訴えている現状をどう理解すればよいのでしょうか。

これまでの日本は、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業規範のもと、社会的に活躍しようとする女性の足を引っ張って家庭の責任を負わせる一方で、男性に対しては、本人の意志にかかわらず「女性に負けるな」「家族を養ってこそ一人前」「男は弱音を吐くな」といった「男らしさ」の期待をかけて社会的成功へと駆り立ててきました。その結果、上に見たような男性優位の社会が維持されてきました。

しかし、そこには男女格差だけでなく男性内の格差も存在しています。男性優位の社会だからといって、すべての男性が社会的に成功したり女性に優越したりできるわけではありません。男性優位の社会的規範が強ければ強いほど、そうした規範に沿えない男性は、女性とは異なる生きづらさに直面することがあります。例えば、女性は就業状況によって婚姻率にほとんど違いがないのに、男性では正規雇用に対して非正規雇用や無職では婚姻率がかなり低い傾向にあります。

また、そうした窮屈な「男らしさ」の期待に応え続けることが、男性の生活の質を低下させたり心身の健康を蝕んだりしている側

面もうかがえます。稼ぎ手責任を果たすために自らが望む以上の長時間労働を強いられ、育児や私生活にもっと時間を割きたくてもそれができない男性も少なくありません。リスクの高い行動を取ることを「男らしさ」と見なす一方で、弱音を吐いたり他人に相談したりすることは男らしくないとしてはばかれる風潮もあります。生活習慣病のリスクが女性では幼少期とともに高まるのに、男性では60代よりも50代の働き盛りで高いこと、男性の平均寿命は女性よりも6歳以上短いこと、中高年で「ひきこもり」の男性は女性の約3倍であること、60歳以上の「孤独死」の8割以上が男性であること、男性の自殺者は女性の約2倍であることなど、いずれも窮屈な「男らしさ」の縛りと無関係ではないように思えます。

ただし、ここで理解しておくべき重要なことは、男性たちがこうした生きづらさを抱えているのは、決して社会が女性優位だからではないということです。これまでの社会は、男性たちに対して、窮屈な「男らしさ」に従い続けることと引き換えに、社会の様々な側面で「下駄を履かせて」きました。つまり、これらの男性たちの生きづらさは、男性が女性よりも上に立つ社会を無理やり維持するために男性たちに負担が求められてきた「代償」なのです。

だとすれば、男性たちがそうした生きづらさを解消する鍵は、決して男性の復讐などではなく、ジェンダー平等にこそ見いだされるはずで、性別にかかわらず、仕事・家庭生活・地域生活の責任とその喜びを分かち合う男女共同参画社会は、女性が経済的に自立して活躍できる社会であると同時に、男性が健康でバランスのとれたより人間らしい生活を送れる社会でもあります。男性も女性とともに、その実現に向けて積極的に取り組んでいきたいものです。

Profile

関西大学文学部教授。専門は、教育社会学、家族社会学、男性学。2016年、女性に対する暴力防止の啓発に男性主体で取り組む「一般社団法人ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン」を設立し、共同代表に就任。著作に「男子問題の時代？」(学文社2016年)などがある。



特集 男だって生きづらい

家事・育児の負担や労働における賃金格差など、女性だけで解決することが難しい課題の多くは、同時に男性側の問題にも着目し、解決することが必要です。今回は「男性は弱音を吐いてはいけない」などといった固定的な「男らしさ」への考えや思い込みから生まれる男性の「生きづらさ」について考えてみました。



調査結果からみえてきた 男性の「生きづらさ」

男女格差について“女性のつらさ”を語ると、「男だってつらいんだ」という反論が飛んでくることがあります。“女性のつらさ”に対して、合わせ鏡のように主張される“男性のつらさ”とは一体どのようなものなのでしょう。

2019年に行われた男性への意識調査（一般社団法人 Lean In Tokyo 2019年「男性が職場や学校、家庭で感

じる生きづらさに関する意識調査）では、「男だから」という固定観念やプレッシャーが原因で約半数が生きづらさを感じているという結果が出ました。生きづらさの1位は、20～30代が「デートで男性がお金を多く負担したり女性をリードすべきという風潮」、40～50代が「男性は定年までフルタイムで正社員として働くべきという考え」となっています。また「力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え」や、「男性が弱音を吐いたり悩みを打ち明けることは恥ずかしいという考え」も男性の生きづらさの内容として挙げられています。

どのようなことに対して「生きづらさ」や「不便さ」を感じますか？
当てはまるものを最大3つまで選択してください。

	1位	2位	3位
20代	デートで、男性がお金を多く負担したり女性をリードすべきという風潮	男性が弱音を吐いたり、悩みを打ち明けることは恥ずかしいという考え	力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え
30代	デートで、男性がお金を多く負担したり女性をリードすべきという風潮	「一家の大黒柱」でいなければならないというプレッシャー 力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え	高収入でなければならないというプレッシャー
40代	男性は定年までフルタイムで正社員で働くべきという考え	高収入でなければならないというプレッシャー	力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え
50代	男性は定年までフルタイムで正社員で働くべきという考え	力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え	「一家の大黒柱」でいなければならないというプレッシャー
60代～	力仕事や危険な仕事は男の仕事という考え	「一家の大黒柱」でいなければならないというプレッシャー	男性は定年までフルタイムで正社員で働くべきという考え 男性が弱音を吐いたり、悩みを打ち明けることは恥ずかしいという考え

※10代以下は回答者2名のため割愛

引用元：一般社団法人 Lean In Tokyo プレスリリース

もし男性自身が自分の希望とは別に、定年まで正社員として働くことを「しなければならないこと」だと考え、そのために頑張って弱音を吐かないのが「男としての生き方」だと思いついていたら、それこそが男性の生きづらさにつながります。また女性に対しては、家事や育児は女性が「しなければならないこと」であり、男性が家計を担うためには、女性のサポートが必要だと考えてしまうことにつながりかねません。その結果、男性は長時間労働による過労死に、女性はワンオペ育児などで育児ノイローゼに陥ってしまう場合もあります。

男性も女性と同様に、性別に基づく考えや思い込みに

よって生き方が制限されています。正社員として定年まで働き続けるという生き方の他にさまざまな生き方があるのに、別の生き方を想像したり肯定したりできないのは、その人自身の問題ではなく、男性の生き方を狭めてきた社会の意識が問題なのです。女性が社会進出したことや自己主張するようになったことなどが原因ではありません。

男女の対立構造では男性の生きづらさは解消できません。社会の変化に合わなくなってきた、刷り込まれたジェンダーバイアスを取り除き、性別に関わりなく、自分らしい生き方を選択できる社会を形成していくことが求められています。

コラム

「男の子らしく」はNGワード？

「男の子はやんちゃで、注意力散漫だよ」。男の子を型にはめるようなママ同士の会話、よく聞きますよね。「男同士の友情や絆ってかっこいいな」。スポーツをテーマとしたドラマを見てそう思うことも多いです。最近大ヒットしたアニメでも、傷の痛みを耐えながら戦うシーンで「俺は長男だから我慢できたけど、次男だったら我慢できなかった」と言うセリフにしばれた人もいたのではないのでしょうか。

こうした普段の何気ない言葉や思いが、実は男性を追い詰めていることにお気づきでしょうか。男女への無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）が、女性ももち

ろん、男性にとっても生きづらい社会をつくることにつながっています。

例えば、男同士の友情、男の絆を美化することは、異質なものを、女性や「男らしくない」男性を排除して、受け入れられない土壌につながっています。そして、誰が「最もマッチョで男らしい」かを仕事やスポーツで競い、競争の勝ち負けでしか、自己を肯定できないことになりがちです。

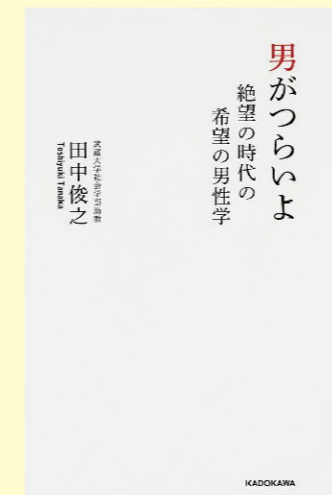
男の子が育つ家庭環境や周囲の関わり方は、将来の「男性の生きづらさ」に大きな影響を与えます。だからこそ大人から子どもに投げかける言葉や接し方には、慎重であってほしいです。「男の子は男の子らしく」は、もうNGワードですね。



関連図書

男性の「生きづらさ」をテーマとした一冊

男がつらいよ 絶望の時代の希望の男性学



田中 俊之 (著) KADOKAWA

一見して、国民的連作映画を思い起こさせる題名の本書は、現代の男性の生きづらさとは何か、また解消するためにはどうすればいいのかを示してくれる一冊です。

男女共同参画と言え女性の地位向上や家事・育児負担などの議論に終始してしまい「女性に関すること」と考える人も多いかもしれませんが、それだけでは何も解決しません。男女共同参画社会を実現するためには男性側の視点も必要なのです。この本では、まさにその男性側からの視点が解説されています。

日本の男性は、仕事や結婚に関して社会から大きく期待され、「男性は女性をリードしなければならない」という風潮がいまだに現在の日本に根強く残っています。本書では、そういった「男性の生きづらさ」についてただ感情的に述べるのではなく、様々なデータを基に論理的に示し、専門用語を使わずに身近な事例によって分かりやすく、かつユーモアを交えて解説してくれています。全編、生きづらさを抱える男性への優しいエールに満ちていますので、ぜひ読んでみてください。

♣ 当センターの情報コーナーで貸出しています ♣

「男らしさ」ってなに?!

作 A・S



お知らせ 男女共同参画センター事業

♣ 子どもと一緒にパパ同士でお話しませんか? ♣

8月28日(土)・10月30日(土)

午前10時~11時30分 対象: パパと0~2歳のお子さん

子どもを遊ばせながら、パパ同士でお話しませんか?
子育てに関することやパパ同士でしか話せない悩みなどなんでもOKです。
入退場自由ですので、気軽にお立ち寄りください。



芦屋市男女共同参画センター
講座ページに入ります



詳細は芦屋市広報もしくはホームページ等をご確認ください★

編集後記

緊急事態宣言が延長され、義両親の家の庭の手入れをする時間が増えた。6月となって雑草を抜くのも段々と暑くなってきた。毎日では通えないが次に行くと綺麗にした箇所も、また生えている。若い頃は実家の庭の草抜きは苦痛で退屈だった。歳を重ね、加えて外出も自粛を余儀なくされる今、マスクを外し黙々と地面に向かうのも悪くないと思い始めた。(管)

秘密厳守

女性相談

面接相談

無料相談・予約専用電話 0797-38-2022【要予約】

心の悩み相談 (1人50分)

7月2日・9日・30日
8月6日・13日・27日
9月3日・10日・24日
10月1日・8日・22日・29日

いずれも金曜日
午前11時~午後4時

家事相談 (1人50分)

7月16日(金)
8月20日(金)
9月17日(金)
10月15日(金)

いずれも
午前11時~午後4時

法律相談 (1人30分)

7月10日(土)
8月4日(水)
9月11日(土)
10月6日(水)

いずれも
午後2時~4時

女性活躍相談 (1人50分)

7月13日・20日・27日
8月10日・17日・24日・31日
9月14日・21日・28日
10月12日・19日・26日

いずれも火曜日
午後1時~4時(別日も可)

★ 一時保育あり・無料(事前予約必要)

★ 相談日は現時点での予定です(随時変更あり)

ウィザス

No. 105

令和3年7月発行(夏号)

企画・執筆

市民編集ボランティア

編集・発行

芦屋市男女共同参画センター ウィザスあしや

芦屋市男女共同
参画センターHP

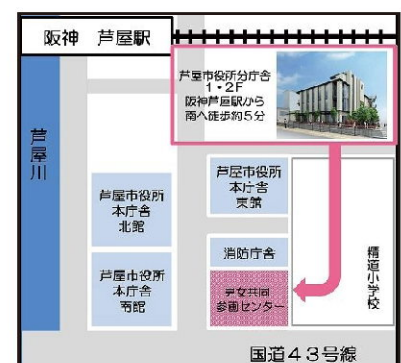
〒659-0064 芦屋市精道町8番20号(市役所分庁舎1・2階)

TEL: 0797-38-2023 / FAX: 0797-38-2175

Eメール: josei-ce@city.ashiya.lg.jp

■開館: 月曜日~土曜日・午前9時~午後5時30分

■休館: 日曜日・祝日・年末年始(12月28日~1月4日)



配偶者やパートナーからの暴力に悩んでいるかたへ ひとりで悩まず、お電話ください。【秘密厳守】

芦屋市DV相談室 TEL: 0797-38-9100 月~金(祝日、年末年始を除く) 9:00~17:30(12:00~12:45を除く)